

梅鶯仏教壮年

第4号
2003年
9月7日

次回例会のご案内

期日：9月28日（日）

夜7時～8時半

（於法輪寺）

プログラム

お勤め

法話（話し合い題材）

話し合い

お勤め練習（正信偈草譜②）

◎話し合いテーマ

「報恩講（おとりこし）の

意味はなんですか？」

九月・長月（ながつき）、秋の夜長の「ひととき」を、共に語り合い、穏やかな思惟の時間を持ってみませんか？

*ご欠席の際は役員までご連絡下さい

○本年度全行事予定が決定

8月31日の役員会で、本年度（来年3月まで）の全ての行事予定を決めていただきましたので、ご案内いたします。
是非予定帳にご記入下さい。

11月8日（土） 19時～

◇報恩講

1月31日（土） 19時～

◇例会

3月13日（土） 19時～

▽役員会

3月28日（日） 19時～

◇総会

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「報恩講」

報恩講は、毎年親鸞聖人の御正忌（祥月命日）、一月十六日にご本山で勤められます。

その歴史と意味は？

そして真宗門徒にとっての真の意義は？

次回例会で話し合います。

「春が来た、春が来た、どこに来た。」という童謡があり、春そのものは目にみえるものではない。水が温み、日射しが明るくなり、桜のつぼみが膨らんで、窓から入る風が暖かく感じられる。春とは、そうした、そこには「春が来た」として春を感じる場面や瞬間は、さまざまです。けれども、春の訪れを感じないという人は、いけません。春という存在は、誰にでも確実にわかるものです。

仏さまも同じです。仏さまもまた、姿かたちでの存在がわかるものではありません。私たちが、仏教の勉強をしたり、お寺へお参りをしたり、おつとめをしたりする、そうした仏縁が重なるなかで、感じられるようになるのです。

「朝には紅顔ありて」

大谷光真門主著より



題材法話

○「けい 蝸、

春秋を知らず」

今年の夏は、炎天日が数えるほどのいわゆる冷夏でした。そんな中でも、精一杯夏を生きようとすゝる蝸の声は絶え間なく聞こえていました。思想家莊子の言葉に「けい 蝸、春秋を知らず」というのがあります。「けい 蝸」（『けい』は虫偏に恵と書きます）というのは蝸のことです。和らかな春の季節を過ぎ、夏の暑い季節になりますと、今が盛りと蝸が啼き続けますが、秋の爽やかな季節になると、見事なまでに、ぱたりと啼き声が聞こえなくなりま

あります。

○私達人間の人生は？

蝸と比較して私達人間はどうかなのでしょう。確かに寿命は蝸の何百・何千倍もあり、春も秋も、冬さえも知っています。けれど宇宙の広大さや、何兆年という宇宙の寿命から考えますと、人間の寿命も泡沫（うたかた）のほんの一刹那であるといえましょう。その泡沫の寿命の中で、「損だ得だ」「好きだ嫌いだ」と、当に鳴き叫んで過ごしているのではな

のが、阿弥陀さまの御願、お念仏のみ教えなの

であります。人間としてのいのちの縁が尽きたならば、必ず真実報土のお浄土に生まれさせていただきます。無量寿のいのちを頂戴する。その南無阿弥陀仏の呼び声に出会うとき、泡沫の人生が、真実の世界への旅立ちの人生へと、意義のあるものに転換され、であります。親鸞聖人は、「火宅無常の世界は、よろずのことと、みなもつてそらごととなきこと、ただ、念仏のみぞまことにおはします」（歎異抄）と仰せられています。とかく自己中心的なものを見方に執着する私の人

○お念仏が拠り所の人生

また、親鸞聖人の師、法然上人は、「現世の生き方は、まず念仏を第一に、念仏が称えられるように生きなさい」と仰られています。働くことも、日々の生活を送ることも、子どもを育てるのも、全て念仏を拠り所とした報恩の生業とするところに、人としての人生の意義があると

（役員会住職法話より）

